

Vol. 176

CONTENTS

- 【コラム】 情報を知りたいと望みながら学校図書館を忘れている…中園 長新
【解説】 生成 AI が強制する高階メタ認知とショートカットへの誘惑—学習者の判断と課題設計—…館野 浩司
【解説】 なぜ学生は丁寧なメールを送ってくるのか?—いつもご指導いただきありがとうございます—…越智 徹

基
般



COLUMN

情報を知りたいと望みながら学校図書館を忘れている

情報教育が盛り上がっている。次期学習指導要領ではどうやら、高等学校情報科だけでなく、小中学校でも情報教育がさらに充実しそうである。探究学習においても ICT 活用などが推進され、校務の情報化による教職員の業務改善なども含めて、現代の学校教育において「教育の情報化」は強力に推進されているといえるだろう。

ところで、「情報」って、何？

この短い問いに対する回答は、本気になれば分厚い学術書を書けるくらい長いものになる。それくらい「情報」は多義的であり広範な概念である。その中でも特に、最近の学校教育における「情報」は特に「情報技術」を重視しているように感じられる。探究学習をすれば、教員も児童生徒も真っ先に GIGA スクール端末にかじりついてネットで情報を検索する。検索エンジンは生成 AI と連携して、私たちに膨大な情報——それはときに偽情報や誤情報を含む——を提示してくれる。

もちろん情報社会あるいは超スマート社会と呼ばれる現代において、探究で AI や ICT を活用することは当然である。しかし、「情報」とはそれだけなのだろうか。インターネットは確かに情報の宝庫だが、そこで見つかる情報がすべてなのか。

情報を知りたいと望む私たちは、学校において最も身近で伝統的な情報施設、すなわち学校図書館の存在を忘れていないだろうか？

学校図書館（図書室など名称は何でもよい）は、初等中等教育段階のすべての学校に必置の施設である。これは学校教育法や同法施行規則に基づくもので、学校図書館法という独立した法律も存在する。専門職として司書教諭（教員）と学校司書（職員）がおり、学校図書館の教育活用についてもサポートしてくれる。

学校図書館の資料は量や質が不十分とか、古い資料しかないといった批判は確かにあるし、それらの改善は当然必要である。しかし、その批判は「情報は新しいものがよい」という価値観にこだわりすぎていないだろうか。古い情報に価値はないのだろうか。インターネットで高速かつ大量に得られる情報と、学校図書館で得られるスローな情報にはどんな違いがあり、それぞれにどんな価値があるのだろうか。なお、念のため断っておくが「紙の情報は正しく、ネットの情報は間違い」ということはない。古来より、本や雑誌にも多数の偽情報や誤情報は含まれているのだが、そういう視点も情報教育でちゃんと扱っているだろうか。

情報教育にかかわる方々は、実践者、研究者、あるいはその取り巻きの方々も、ぜひ学校図書館にも目を向けてほしい。ICT 活用とか技術だけでない「情報」を考えるきっかけが、そこに見出せるはずである。それは具体的には……おっと、ここに記すには余白が狭すぎるので続きはみなさんの考察にゆだねたい。



中園長新（麗澤大学）（正会員）nnakazon@reitaku-u.ac.jp

麗澤大学国際学部准教授。学生時代は情報科学と教育学を学び、現在は校種・教科等横断的な情報教育や多様な教育資源を活用した情報教育の在り方を研究している。本学会誌編集委員、コンピュータと教育研究会幹事、シニア会員。

LOGOTYPE DESIGN...Megumi Nakata

生成 AI が強制する高階メタ認知と ショートカットへの誘惑 —学習者の判断と課題設計—

館野浩司

北陸大学

生成 AI という認知的に異質なツールの登場

生成 AI は、これまで学習者が日常的に用いてきた道具とは異なり、思考や判断の進み方そのものに直接作用する。思考の途中で「この出力を採用してよいか」「どこまで任せるか」といった判断を繰り返し要求し、さらに文章や構成案といった完成形に近い形を、思考が十分に整理される前に提示することで、思考と表現の順序そのものに影響を与える。

生成 AI は、必ずしも正解ではないにもかかわらず、正解であるかのように見える回答を出す。この特徴は技術の未成熟によるものではなく、確率的な出力生成を基盤とする技術構造から生じている。そのため学習に用いる際には、出力の質そのもの以上に、どのような判断のもとで利用するかが重要になる。

従来の学習支援ツールは、使い方を誤れば誤答につながることはあっても、「正しそうに見える誤り」や「思考を代わりにやってもらったような感覚」をここまで自然に生み出すことはなかった。生成 AI は、学習者の判断の在り方そのものに影響を与える点で、認知的に異質な存在である。

本稿では、生成 AI の利用が学習者の判断にどのような変化をもたらしているのかを、学生の利用実態と教育実践の観察に基づいて検討する。その際、生成 AI の是非やルールの話に収めるのではなく、どのような判断が学習者にゆだねられて

いるのかという構造に着目する。

学生の生成 AI 利用実態と、高階メタ認知のゆだねられ方

学生による生成 AI の利用は、課題に取り組む際の情報探索や思考整理のために用いられるなど、従来の学習支援ツールの延長として理解できる日常的な学習行動の一部となりつつある¹⁾。

生成 AI を用いて課題に取り組む際、学生は、どのような情報をプロンプトとして与えるか、自身の状況や前提をどこまで明示するかといった判断を行っている。これらの判断は、課題の理解度や自分の到達度を踏まえて学習方略を調整するという点で、従来から求められてきたメタ認知の範疇に収まる。学習におけるメタ認知は、自身の理解状態や学習方略を振り返り・調整する働きとして整理されてきた²⁾。

しかし生成 AI の利用場面では、方略の点検だけでなく「いまこの局面で生成 AI を使うこと自体が学びにとって適切か」「出力をどこまで採用し、どこで立ち止まるか」という判断が、学習過程の各所で繰り返し要求される(図-1)。

生成 AI は、学習者の学びにおける判断を自動的に担保する設計にはなっていないため、立ち止まるべきポイントや判断の基準があらかじめ示されない。その結果、出力を採用するかどうかの判断が学習者側に残りやすい。

この結果、従来は教員が担ってきた「学生のメタ

ここで問うべきは、学習者に生成 AI の「正しい使い方」を求めるのではなく、教員がどのように課題を設計すれば、学習者の判断が働かざるを得ない状況を作れるかである。

生成 AI 時代の教育設計において、改めて検討したい 1 つの方策として、課題の透明化がある。Transparency in Learning and Teaching (TILT) は、課題の目的・作業内容・評価基準を明示することで学習の見取り図を学習者に与える枠組みである⁵⁾。本稿の立場では、透明化は生成 AI の使用可否を管理するためのものではなく、学習者がどのような判断を引き受けることになるのかという前提条件を共有するためのものとして位置づける。

ただし、透明化は万能ではない。手順や観点を細かく示しすぎると、課題は「指示どおりに進める作業」になりやすく、生成 AI によるショートカットとも親和的になる。重要なのは、何を透明化し、どこに曖昧性を残すかを設計することである。この曖昧性とは、不備や説明不足ではなく、学習者自身が判断を引き受けざるを得ない余地として、意図的に残されるものである。

目的や評価基準は明確に示しつつ、結論の導き方や振り返りの内容については、あえて詳細を規定しない。このような設計により、学習者は生成 AI の出力をそのまま採用するか、自分の言葉で書き直すか、あるいは検証を行うかといった判断を回避できなくなる。高階メタ認知を「教える」のではなく、「働かせる」ための条件づくりである。

この考え方を具体化した実践例として、筆者の担当するある基礎科目における最終課題レポートを挙げる。ここでは TILT の考えに基づき、目的・作業内容・評価の観点を明示した上で、レポート作成に先立って Fun/Done/Learn による振り返り^{☆1}を行わせた(図-2)。透明化によって「何が求められているか」を共有しつつ、Fun/Done/Learn

の中身、すなわち何を面白いと感じ、何を行い、何を学んだのかについては学習者自身の判断にゆだねている。こうしてレポートの素材となる経験や試行、学びをあらかじめ自分の言葉で外在化させることで、生成 AI に一足飛びで書かせる誘惑を下げ、出力をそのまま採用するのか、自分の言葉で書き直すのか、あるいは検証を行うのかといった判断を、回避できない形で言語化させることを狙っている。

生成 AI をめぐる技術環境は変化が激しく、教員がその利用を事前に規定し尽くすことは現実的ではない。だからこそ、判断を学習者にゆだねる部分を成り行きに任せるのではなく、課題の構造の中で可視化し、言語化させる必要がある。生成 AI 時代の課題設計とは、ツールの使用可否を管理することではなく、学習者の判断が働かざるを得ないポイントを、意図的に作ることである。

生成 AI が表現主体に与える影響

前章では、生成 AI 時代の課題設計として、学習者の判断が働かざるを得ないポイントを意図的に設けることの重要性を述べた。同じことは、レポートや文章を書く場合にも当てはまる。生成 AI の問題は誤情報や剽窃といった分かりやすい論点

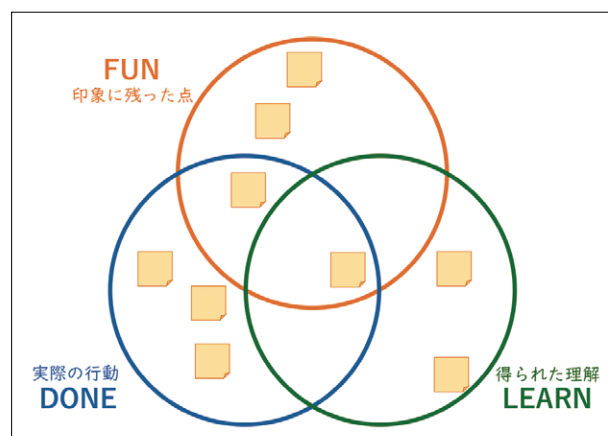


図-2 Fun/Done/Learn による振り返りの枠組み
Fun (印象に残った点), Done (実際の行動), Learn (得られた理解) から振り返りを行う。必要に応じてその他の気づきを記してもよい。実際の課題では図のような円は用いず、個条書きとした。

^{☆1} Qiita: ファン・ダン・ラーン (FDL) ふりかえりボード、
<https://qiita.com/yattom/items/90ac533d993d3a2d2d0f>

にとどまらず、学習者が「自分の言葉で書いている」という感覚を、静かに失っていく点にある。

今や、生成 AI が出力する文章は、文法的に整っており、語彙、論理の形も無難にまとまっている。その結果、提出物は「よく書けた文章」に見える一方で、その文章が学習者自身の理解や思考の過程をどこまで反映しているのかは見えにくくなる。これは教員のみならず、学習者本人にとっても、理解状態を文章から読み取ることを難しくする。

さらに厄介なのは、生成 AI によるこなれた文章が、かえって手を加えにくいことである。違和感を覚えて補足や修正を加えようにも、自分の文体で書き足すと全体の調子が崩れやすく、「直す」より「合わせる」方向へ引っ張られる。その結果、戸惑い、十分に納得できていない感覚、面白いと思った点といった「引っかかり」が表に出にくくなり、表現を通じた振り返り(=思考の外在化)が弱まる。

生成 AI は表現を支援する一方で、場合によっては学習者から表現の主導権を奪い、学びの当事者としての感覚を薄める。次章では、この変化を個別の授業実践の問題にとどめず、生成 AI がもたらす知識観の変化として捉え直し、高階メタ認知が避けられなくなる理由を整理する。

生成 AI がもたらす知識観の変化と、高階メタ認知が避けられない理由

Web の普及は知識へのアクセスを容易にしたが、生成 AI はさらに一歩進め、知識の生成そのものを学習者の手元に引き寄せた。生成 AI の出力はその場で得られる一方、参照可能な根拠として蓄積しにくく、学習者は出力をそのまま扱うのか、手直しするのか、検証するのといった判断を各所で引き受けることになる(図-1)。

レポートや論文作成は本来、思考を外在化し、自分の理解を点検する行為でもあった。生成 AI がこの工程に入り込むことで、うまく使えれば思考は加速し得る一方、任せ方を誤ると、思考の外

在化が空洞化しやすい。問題になるのは誤情報の混入だけではなく、「どこまでを自分の理解として引き受けたのか」が不明瞭になることである。

このとき避けられないのが高階メタ認知である。生成 AI が常に利用可能な環境では、「使う／使わない」を一度決めて終わりにはできず、どの判断を自分で引き受け、どの判断をゆだねるかを振り返り、調整する自己コントロールが学習過程に組み込まれる。さらにこの構造は大学生の学習に限られず、生成 AI との協働が即時的な成果を高める一方で、その後の単独作業では内発的動機づけが低下することも報告されている⁶⁾。生成 AI 時代の教育は、個人の資質に還元するのではなく、判断が生じる場面をどこに設けるかを問われている。

参考文献

- 1) 館野浩司, 倉橋 農: 大学生の学びにおける生成 AI 利活用実態の類型化と自己効力感の二面性, 情報教育シンポジウム論文集, Vol.2025, pp.170-175 (2025) / 館野浩司, 倉橋 農: 大学生の生成 AI リテラシーを「行動」として捉える, 情報処理学会研究報告, Vol.2026-CE-183, No.10, pp.1-4 (2026).
- 2) 三宮真智子 (編著): メタ認知—学習力を支える高次認知機能, 北大路書房 (2008) .
- 3) Risko, E. F. and Gilbert, S. J. : Cognitive Offloading, Trends in Cognitive Sciences, Vol.20, No.9, pp.676-688 (2016).
- 4) Hak, J., Johnson, N. L., Amoozadeh, M., Alipour, A. and Chattopadhyay, S. : Observing Without Doing: Pseudo-Apprenticeship Patterns in Student LLM Use, arXiv:2510.04986 (2025).
- 5) TILT Higher Ed : Transparency in Learning and Teaching (TILT) (オンライン), <https://tilthighered.com/> (参照 2026-01-28)
- 6) Wu, S., Liu, Y., Ruan, M., Chen, S. and Xie, X.-Y. : Human-Generative AI Collaboration Enhances Task Performance but Undermines Intrinsic Motivation, Scientific Reports, Vol.15, Article 15105 (2025).

(2026年1月31日受付)

館野浩司 (正会員) k-tateno@hokuriku-u.ac.jp

北陸大学経済経営学部講師, 修士 (理学). 数学, 情報教育が専門. ゼミでは, 言語モデルの理論からアラインメントまで幅広く扱っています.



なぜ学生は丁寧なメールを送ってくるのか？ —いつもご指導いただきありがとうございます—

越智 徹

大阪工業大学

「件名なし」から「過剰な敬語」への大逆転

かつて大学教員の間では、学生から届く「無作法なメール」が話題になることが少なくなかった。件名がない、名乗らない、どこの誰か分からない——いわゆる「ガラケー時代」の短いメッセージ文化が、そのまま教員への連絡にも持ち込まれていたのである。

ところが、2020年のコロナ禍を境に、その様子は一変した。教員の受信トレイに届くようになったのは、驚くほど丁寧で、ときにビジネス文書のような敬語を駆使したメールであった。なぜ、メールを使わないとされる現代の若者が、これほどまでに丁寧な文面を書くようになったのか。こうした疑問から、筆者は学生のメールについて簡単な調査を行い、その結果を2024年の情報教育シンポジウム(SSS)で発表した¹⁾。本稿は、この発表を下敷きに、いまも届き続ける「丁寧なメール」について考えてみたものである。

メールはもはや「手紙」という名の特殊技能

そもそも、この発表についてのきっかけは2021年のジロウによる tweet^{☆1}であった。

少し前まで「件名がない、名乗らない、どの授業の受講生が分からない。学生から送られてくるメール作文がめっちゃくちゃだ！」と憤慨してる教員がよくいたけど、ここ2年ほどで社会人マナーみたいなのをきっちり押さえたメールを送ってくる学生が急に増えた。学生とメールの関係に変化があったんだろう

☆1 <https://x.com/jiro6663/status/1466824168532766720>

2021年12月4日に投稿された tweet は瞬く間にバズり、多くの返信がついた。筆者もこれを見て「確かに、これまで失礼なメールが多かったのに、いきなり大逆転したよなあ……」と改めて思ったものだ。このころから2026年現在まで、とにかく学生から届くメールは過剰に丁寧なのである。よくあるのが「いつもお世話になっております」といった典型的なビジネスメールの書き出しが多く、また中には「いつもご指導いただきありがとうございます」といったまるで師匠と弟子のような、徒弟制を思わせる文面が書かれていることもある。たとえば最近届いた学生からのメールは次のような文面である。

越智先生

お世話になっております。

****です。

****についてご相談があり、ご連絡致しました。昨年末に****を送信したつもりでございましたが、確認したところ送信できていなかったようで、****という状況です。

大変お手数おかけして恐縮ですが、****をご用意いただくことは可能でしょうか。締切間近のご連絡となつてしまい、申し訳ありません。

ご多忙のところ恐れ入りますが、確認のほどよろしくお願いたします。

お世話になっております、ご相談、ご連絡、お手数おかけして、ご多忙のところ恐れ入りますが、など典型的なビジネスメールの文面である。筆者は企業とも付き合いがあるが、こんなに丁寧なビジネスメールは書いたことがない。筆者は授業ガイダンス

時には、夜間や早朝でも送ってかまわない、自分が何者か、どの授業の内容か、どのような要件かをコンパクトにまとめて書けばよい、と指導しているが、なぜ学生はここまで過剰で丁寧なメールを送ってくるのか。恐らく、学生たちの日常生活からメールという手段がほぼ消失しているという事実ではないか。彼らの日常的なやりとりは SNS や LINE など、メール自体を書くことがないのだろう。それゆえに、メールに書くべき「ちょうどよい丁寧さ」が分からないのではないか。これは、一昔前のメディアで言い換えると「手紙」ではないか。もはや日常生活において葉書、手紙を出すことは皆無に近い。年に1度は書くであろう年賀状ですら、17年連続で衰退しているとの報道もある。筆者はまだ年賀状は書くが、いざ「手紙」を書く、しかも自分より上の立場の人に対して、となると経験がないために色々と調べて書くだらう。それこそ最近なら生成 AI に頼って書くだらうが、そこで「過剰にならないちょうどよい丁寧さ」で書くことができるだろうか。そうすると、今のメールは一昔前の手紙に近い特殊技能になっているのではないか。

メールに関するアンケート調査

そこで、筆者は2024年前期授業中に、主に1年生が受講している情報リテラシー入門の授業内で簡単なアンケートを実施し、168人から回答を得た。このアンケートでは、プライベートでのE-mailやキャリアメールの使用の有無、また教員へのメールの文面をどのようにして考えているか、などを尋ねている。詳細はSSS2024の発表論文を参照いただきたいが、結果を一部紹介する。

まずプライベートでE-mailを使用しているか、同様にキャリアメールを使用しているか、について質問した。

E-mailに関する結果が表-1であるが、プライベートでE-mailを「ほとんど使用しない」「使用したこ

とがほぼない」と答えた学生は合計で63%に達する。彼らにとっての主たるコミュニケーションツールはLINE等のSNSであり、メールは「大学からの通知を受け取るための窓口」や「サイトの会員登録用」という限定的な役割になっているのだろう。

また、携帯電話会社のキャリアメール(表-2)では、この調査結果では使用しているのは2割以下であり、一時期学生のメール環境の定番であったキャリアメールはもはや廃れつつあると言ってよい。表中にもあるように、そもそも格安SIMではキャリアメールがないこともあり、かつてi-modeから始まったキャリアメールという特別なメール環境は終わるのではないか。この2つの結果から考察すると、彼らのほとんどは日常的にメールを使用しておらず、しかし教員に非対面で連絡を取るにはメールしかないと、結果として「教員にメールを送る」という行為は、日常の延長ではなく、大袈裟に言えば未知の作法を要求される「特殊な儀式」になっているのではないか。

テンプレートが作る「完璧すぎる学生」

このアンケート調査では、さらにあるシチュエーションを設定し、この場合に適切なメール本文を書くという項目も用意している。その結果として、次のような「丁寧すぎる」文章があった。

表-1 プライベートでE-mailを使用しているか

項目	回答数(割合)
よく使用している	16(10%)
たまに使用している	46(27%)
ほとんど使用しない	71(42%)
使用したことがほぼない	35(21%)

表-2 キャリアメールを使用しているか

項目	回答数(割合)
よく使用している	10(6%)
たまに使用している	20(12%)
ほとんど使用しない	78(46%)
使用したことがほぼない	27(16%)
格安SIMなどでキャリアメールがない	10(6%)
キャリアメールがよく分からない	23(14%)



栗田士郎先生、いつもご指導いただきありがとうございます。
います。

情報学科一年工大太郎です。授業内容でデータ工学について質問させていただきたいことがあります。以前、研究室に伺ったところいらっしやらなかったの
で事前にメールさせていただきました。お手数をおかけしますが、研究室にいらっしやる時間を教えてください
だけますでしょうか。
お忙しいところ恐れ入りますが、何卒よろしくお願
いします。

まさに我が意を得たりである。恐らくこういった文章を書くのは、何かテンプレートか何かがあるに違いない、と当時「メール 先生 書き方」で Web 検索し、その通りに指南しているサイトを発見したが、本稿の執筆に当たって再度同じように検索したところ、やはり同様に「大学の教授へのメールの書き方、返信の仕方」等を謳うサイトが複数ヒットした。あるサイトでは、本文の最初でまず名乗る、端的に必要な内容のみにまとめる、適度に改行して読みやすくする、丁寧な日本語を使う、など書かれている項目は非常に有用だが、例文になると突然「いつもご指導いただき、ありがとうございます」が登場し、また締めの一文例として「お忙しいところ恐縮ですが、何卒よろしくお願いたします」「引き続きご指導ご鞭撻よろしくお願いたします」などが登場する。恐らくビジネスメールではこれらの言葉は一般的に用いられているだろうが、学生と教員間では過剰な装飾ではないだろうか。とはいえ、教員と学生の間には明確な「権力勾配」が存在しており、学生側は必要以上に教員を「敬意を払うべき存在」として意識しているだろう。「丁寧すぎて損をすることはない」という防衛本能が、検索結果のテンプレートと結びつき、結果として「過剰」でともすれば「慇懃無礼」とも取られかねないほどの丁寧さを生んでいるのである。

「ちょうどよさ」を模索する コミュニケーションの未来

ここまで見てきたように、学生から教員へのメールが過剰に丁寧になっている背景には、単なる礼儀正しさやマナー教育の成果というよりも、メールという手段そのものが日常から切り離された存在になっているという事情があると考えられる。学生にとって、メールは友人との軽いやりとりに使う道具ではなく、「失敗してはいけない」「失礼があってはならない」特別な場面でのみ用いられるメディアになっているのである。このような状況において、学生が「先生 メール 書き方」と検索し、Web 上にある例文やテンプレートを参照するのはごく自然な行動だろう。結果として生まれる「完璧すぎる文面」は、学生自身の本音というよりも、テンプレートが要請する理想像をなぞったものに近い。そこには、「多少過剰でも丁寧にしておいた方が安全だ」という、防衛的な意識が強く働いているように見える。

一方で、教員側から見ると、こうした過剰な敬語や装飾的な表現に違和感を覚える場面があるのも事実である。今回の再調査で、多くの学生が「丁寧だが過剰ではない」文面を最も適切だと選択したことは、学生自身もまた、その「ちょうどよさ」を模索している途上にあることを示している。このように考えると、学生のメールが過剰に丁寧であることは、ただちに是正すべき問題というよりも、新しいコミュニケーション環境への適応過程の一断面として捉える方が自然であろう。かつて手紙を書く際に、多くの人が文例集を参考にしながら試行錯誤していたように、現在の学生もまた、メールという「現代の手紙」に向き合いながら、相手との距離感を探っている最中なのである。

最後に、生成 AI (Microsoft Copilot) を用いて教員への問合せメールを試みに作成してみた。すると、これまで見てきた例とよく似た、実に見事な「丁寧なメール」が出力された。

件名：データ工学の質問に関するご相談
栗田士郎 先生

お世話になっております。
情報学科 1 年生の工大太郎(学生番号：J24-123)です。
授業「データ工学」について、いくつか理解が不十分な
点があり、先日先生の研究室を訪ねたのですが、ご不
在だったため質問することができませんでした。
つきましては、直接ご相談させていただきたく、先生
のご都合のよい日時を教えてくださいませんか。
お忙しいところ恐れ入りますが、ご確認のほどよろし
くお願いいたします。

参考文献

- 1) 越智 徹：なぜ学生のメールはあんなに丁寧なのか？, 情報
教育シンポジウム論文集 (SSS2024), Vol.2024, pp.396-403.
(2026 年 1 月 31 日受付)



越智 徹 (正会員) toru.ochi@oit.ac.jp

大阪工業大学情報センター准教授。博士 (情報学)。
情報工学, 情報教育が専門。情報センター教員として,
2018 年度より導入した BYOD 運用や初年次情報リテラ
シー教育などを担当している。本会シニア会員。

【ご案内】会誌「情報処理」のオンライン記事について

会誌「情報処理」の特集記事は、オンラインのみ掲載しております。閲覧方法は会員区分によって異なりますので以下をご確認ください。

【個人会員の皆様】

電子図書館 (情報学広場: <https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/>) にログインし、該当記事の pdf をダウンロードしてください。

すでに電子図書館をご利用いただいている方は今までどおりです。

電子図書館を初めて利用される方は、会員としてのユーザ登録が必要になります。

未登録の方には毎月月上旬に次の件名のメールを送信しておりますので、到着次第、登録してください。

- ・件名: [情報学広場: 情報処理学会電子図書館] ユーザー登録のご案内

- ・差出: ipsj-ixsq@nii.ac.jp

★詳細: 電子図書館利用方法 (個人用) - 利用までの流れ (<https://www.ipsj.or.jp/e-library/ixsq.html#anc2>)

ご案内メールをお急ぎの方や閲覧方法が分からない方は、会員サービス部門 (E-mail: mem@ipsj.or.jp) に

会員番号を添えてご連絡ください。

【賛助会員・購読員の皆様】

賛助会員・購読員の企業・大学に所属されている方に「情報処理」(冊子) を貸し出した場合、特集の閲覧方法について照会
がございましたら、次の手順をお知らせください。

<手順>

- (1) 「情報処理」の特集ページ (扉または概要ページ) を開く。

- (2) 閲覧申込の URL にアクセスする (または QR コードを読み取る)。

- (3) 必須事項を入力し送信する。

- (4) 次の件名 (5 月号の場合) の受信メールに従って、電子図書館から特集の pdf をダウンロードする。

- ・件名: 情報処理 2026 年 5 月号 (Vol.67, No.5) 「チケットコード」とご利用方法のご連絡

★注意事項

- ・法人アカウントではご利用いただけません。

- ・閲覧される方が電子図書館のユーザ ID をお持ちでない場合は、ご自身でユーザ登録する必要があります。

本件に関する問合せ先: 一般社団法人情報処理学会 会員サービス部門 E-mail: mem@ipsj.or.jp

【個人会員】



電子図書館
(情報学広場)

